

【解題】

## 『JA の地域農業戦略と地域農業マネジメント体制のあり方を探る ——我々はこう考え実践する』

JA-IT 研究会副代表委員 黒澤賢治

### ■ 34 回公開研究会のねらい

解題ということで、今回の研究会の基本的なねらいについてお話させていただきます。

JA-IT 研究会は、今村代表を中心に、すでに 33 回の公開研究会、それから現地研修会、次世代の人材養成セミナーをうまく組み合わせながら、10 年を歩んできた。

営農経済の事業自体は、今日ご参加の皆さん、それぞれの現場で実践されているとおり。カテゴリーの積み重ねが連鎖をしている営農経済事業だ。単純な部分がひとつだけ抜けても地域の営農システムは守られない。全国の JA のなかには、そんな実態も垣間見られる。

昨年秋の JA 大会以降、運営委員会等で本格的な地域営農をどうするか、どうあるべきかという議論を重ねてきた。それから、予測値をはるかに超える勢いで進んでしまった 2010 年のセンサスの特筆される課題、具体的には高齢化の問題や就労構造の変化、地域の変化といった課題が出てきている。やがて 2015 年、地域の農業や営農は大きな変化のなかに置かれるという感じがしているところだ。

本日は、全国で地域営農、産地づくり、産物づくり、人づくり、それに欠かせない大きなポイントを、それぞれすばらしいコーディネートで実践されている特徴のある産地 JA の、実際にオペレーションをしている皆さんからご報告いただく。お忙しいなか、研究会のためにお越しいただいたことに、まずお礼を申し上げます。

水田営農 2 JA、あるいは中山間の果樹の多品目化、大型の野菜の総合産地と、非常にもりだくさん。どうか、単なる研究会ではなく、10 年以上地域営農最適を目指してきた JA-IT 研究会の企画をぜひ実践に移していただき、さらにそれぞれの JA の営農最適をつくりながら、地域営農システムの構築をしていただければと思っている。

### ■ 6 次産業化をベースにした海外戦略

機会があり、私は TICAD (アフリカ開発会議) のフォーラムに参加させていただいたことがある。また JICA (国際協力機構) とは、人材養成の関係で長い間、業務委託をいただいている。JICA が捉えた海外輸出戦略だが、どうやら国の描いた餅のようにはいかないという実態がある。実は、海外輸出戦略における 6 次産業化の動きのなかで、いくつか意外な傾向がある。

たとえば、今、フランスではカレーライスが大ヒットしている。なぜカレーライスなのかというと、アニメ産業の影響だ。フランスでは日本のアニメが非常に浸透しはじめ、そのなかではカレーライスを



食べるシーンがしばしば登場する。そのために、カレーが売れているのだ。あるいは、イタリアではてんぷらが売れている。ただ残念ながら、地域システムが連携型になっていない。単品で戦略を組んでいるために、これだけ和食のブームが起こっていても、トータルな提案力がない。産地がバラバラ。だから、山菜のてんぷらが単品で出されていて、ごみもあればたらの芽もある、というようなコーディネートはできていない。

営農経済事業の致命的なところは、そういう商品コーディネート、365日を通じた地域づくりのための商品づくりが、共通の価値観、共通の体系でできていないことではないかと思う。

鮮度訴求なども、果樹などで多少はあるが、他はほとんどない。実は日本の果樹はやや過熟。すぐ食べられる状態だ。ただ、それゆえに痛む。したがって、実は鮮度訴求ではなく、いわゆる単品が持つ機能を前面に出したものが非常に売れている。賞味期限も、ロスをさけて、6ヵ月から1年というロングスパンのものが安定的に売れている。たとえば広島が生ガキが、冷凍で6ヵ月もつようになった。そして、そのとたんに海外戦略が可能になった。

まさにそういう面では、日本の食の感覚と、6次産業化をベースにして海外戦略を打っていくときの価値観は大きく違うのではないかという感じがしている。

## ■ 地域農業の拠点としてのJA営農経済事業の機能強化を考える

今日の中心課題となる「地域の営農システム、産地のシステムをどう確立してきたか」だが、全国の冠たるJAの皆さんが、そんな観点から報告をしてくださると思う。

今村先生がよくお話されている「多様性」だが、日本の農業が他の国の農業と違うポイントは、多様性のある地域づくり、産物づくりだろう。重要なのは、地域実態と乖離しないこと。ベースは地域実態だ。地域の実態をしっかりと担保して、地域のリスク、マイナスの部分をどういう仕組みで補うか。そういう面では、すばらしい方法を持っているJAの皆さんが、今日は大勢いらっしやっている。

営農経済事業こそ、ツールがなかなかつくりづらい。指導事業から最終的な加工販売まで含めると、最低でも5つか6つのカテゴリーを一気通貫で構築しておかないと商品にならない。そういう面では、カテゴリー別の最適から地域最適といわれる一気通貫の体制をつくっていくことが地域営農システムだと考えている。

さらに、営農経済事業は人由来。そういう面では、ヘッドクォーターの役割、あるいは営農センターのプランナーとしての役割、あるいは実際にそれらを支援するコンサルの役割。こういうさまざまなものを地域やJAのなかでコーディネートしていく。実は、今日ご報告いただく皆さんの資料を事前に見せていただいたが、そういう地域のコーディネート力を非常に持っているJAだということが共通している。今回の研究会を、地域最適、JA最適、組合員最適の地域営農システムを同一の価値観でつくりあげていただく糸口にしていただければ幸いだ。

最後になるが、営農経済事業ほど人づくりで気を抜くと人材が欠落してしまうものはない。そういう面では、地域リーダー、JAの産地リーダー、パートナー先のリーダー、この3階層がしっかりとコネク特できて、初めてJAらしい営農システムができるのではないかと考えている。

私は群馬在住だが、実はこのところ、いろいろな地域ビジネスが登場してきている。本来は産業の体をなしていないような分野からカムバックしてきて産業になってきたものがたくさんある。売れると一番おもしろいのは、女性の美容支援ができる産物。私のところではまだ養蚕をやっているが、絹のフェイスタオルが、今話題になってきている。それから、絹のパウダー。絹はタンパクだから、女性の皆さんがつかうパウダーのなかにそれを入れている。また、来週から ICOMOS (国際記念物遺跡会議) の調査を担当することになった。2014 年の世界遺産登録を目指して、本格的な対応をしていく。

手前味噌な PR もさせていただいたが、私も徐々に JA の経営に携わることになり、昨日引き継ぎを受けた。これから皆さんと JA のあり方等々含めてがんばってまいりたい。

若干舌足らずの面もあったが、そんな意義を感じていただいて、今日、明日、コメントいただく先生方や事例報告をいただくそれぞれの皆さんに感謝をこめて、しっかりとした第 34 回公開研究会になることをお願いし、終わらせていただく。

ありがとうございました。